

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	安川, 正彬
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.11 (1952. 11)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19521101-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

依つてとにかく圍牆は進められて行つた。

圍牆に際しては然し領主の同意を得る必要があつた。若い領主は圍牆が不利なことから斷然これに反對した。圍牆を主張する一方の側は領主のこの態度に憤慨し、その早急な解決のため提訴した。ところが「裁判官達は一方には金錢を以て他方には勇氣があるためこれが自分等の利用し得る一仕事に値すると思ひ、一度の公判で始末しない方が寧ろ得策と考へ、敢て兩者を喚びて辯を續けさせ、訴訟を却下した場合が自分等にとつて多少とも歩のある仕事たり得ると見た。圍牆の主張者は意外に嵩む裁判の費用に驚き、圍牆を必ずしも喜ばない者に對して迄も必要な経費の一切を分擔させることにした。勿論これには反對者もあり、圍牆を主張する側は探偵を派遣して違犯者を監視し、又不同意者を恐喝して服従せしめ、如何なる手段に訴えても圍牆を實行しようと試みたのであつた。

「すべてが終つてしまつて後は最早や生き永らえることも難いであろう」。圍牆に對して頑迷なかかる態度を示した領主も然し遂には屈服し、「改良は他の所領において一般的である程非常に大きくはないであろうが、改良はとにかく改良であろう」として圍牆に同意して呉れた。圍牆を主張した側は「諍が起つて計畫を邪魔することない」と見て取るや「直ちに溝を掘り、垣を植えて實行に乗り出したが、然し「神にも、平等や正義に關する最も神聖な神の掟にも相談せず、自分等の智慧や裁判官達の助言に信頼したから」、「非常な混亂となるばかりでなく除くに

も犠牲の多い障碍をこの人々の前途に横たえるため神は峻烈にして苛酷な判決を下し給うた」感がないわけでもなく、例えは領主の急死に依つて意志の疏通が阻まれたため一時混亂に陥つたというようなこともあつたが、全般的に見てケイソープにおいては圍牆が大した困難もなしに進められ、圍牆を強行した上層の間における致富には特に大なるものがあつたのである。

然し中層の者が勝手なこの圍牆に依つて消滅も免れなかつたという事實は更になかつた。圍牆の行なわれた最中においてもこの階層に屬する人々は、財政の窮乏に乗じて嘗て舊領主から買入れた大きくはない土地を依然として維持し続け、このためケイソープにおいては「小さな自由保有地がこれぐら多い場所はない」といわれた舊い證言がその儘通用する程であつたのである。但し下層の貧農は灌木地帯が圍牆されたため残つた最後の牧場を失つたばかりでなく、必要な薪炭を獲得することすら困難となり、圍牆の負擔をその一身に引受けて貧困の度を愈々深める結果となつてしまつたのであつた。

圍牆に依る影響は從つて各階層において必ずしも一様ではなかつた。少數の一部は圍牆に依つてなるほど不幸な結果に陥つたが、これに反し失職の不安から圍牆を最も嫌つた小土地の自由保有者には何の影響もなく、圍牆が終つて後も依然としてその地位を維持し続け、寧ろ増勢の傾向をさへ示していたのであつた。

(渡邊國廣)

編集後記

世に平和を願わぬものはないが、今日、米ソ二大陣營對立のうちに分れた「二つの平和」が、「冷たい戦争」という憂慮すべき絆によつて、とりもたれていくことは、皮肉というより、餘りにも惨な平和と云わねばならぬ。そして將來に明るい希望の扉を閉じ、前途に一抹の不安を感じているのは、決して少數の人々ではあるまい。英國に芽生え、米國の地に深くその根を下し、今日益々成長、發展の途上にある近代經濟學と、他方のマルクス經濟學との交流、乃至對決。經濟學にこれ程の大問題もまたないであろう。それに眞正面から四つに組み、その解決の努力に全生涯を投じた經濟學者、一橋大學教授杉本榮一先生が、去る九月二十四日狭心症にて急逝された。この「二つの經濟學」は未解決のまま、先生五十一歳の生涯を終えられたのである。

慶應義塾にとつて、杉本先生ほど關係の深かつた經濟學者も少いであろう。三田に日吉に度々講演に來塾され、塾生にとつても、最も親しみの多かつたことと信じている。去る七月四、五の兩日、本塾で開かれた日本統計學會に來塾されたのが最後となつた。當時、にこやかに微笑んで居られた御姿は、いままお眼前に彷彿し、その時の記念寫眞を手にしては、一しお尊敬と懐しみの念にかられるのである。先生の一橋大學葬に、塾の關係者一同と參列し、衷心御冥福を祈つたのである。

(安川正彬)

昭和二十七年十月二十五日印刷	昭和二十七年十一月一日發行
第四十五卷	定價 七拾圓
第十一號	送料 四圓
東京都港區芝三田慶大經濟學部内 發行所 高村象平	東京都港區芝三田慶大町八 印刷所 圖書印刷株式會社 川口芳太郎
豫約購讀料	一年分 金八四〇圓(送料共)
	半々年分 金四二〇圓
發行所 東京都港區芝三田二丁目 慶應義塾大學經濟學部研究室内 慶應義塾經濟學會	